

3年を超えると高率に ひきこもりから不就労に

NPO法人教育研究所が明らかに

年を超えると不就労の割合が高くなっていった。高校中退者の中には経済的理由で中退した者が多いことも明らかになった。

◇ ◇ ◇
調査は、05年から11年までの6年間に、富山県黒部市の宇奈月自立塾で共同生活を伴う職業体験などの自立訓練を修了した132人を対象に実施された。

対象となった修了生の男女比は男性117人、女性15人。年齢構成は20代60%、30代以上29%、10代10%。修了生の高校、専門学校、大学(大学院含む)の中退率はそれぞれ33.3%、31.1%、57.8%で、文科省調査の高校中退率全国平均値1.7%(平成22年度)に比べてとても高かった。高校中退者の中には、経済的理由による者が多かった。

少子化が進み、労働人口の確保の観点から若者の就労支援が課題となっている。そんな中で、高校中退者がひきこもり、その後の不就労の要因になっていることが、NPO法人教育研究所(牟田武生理事長、横浜市)がこのほどまとめた調査研究から分かった。それによると、高校などを中退後にひきこもった場合に長期化する傾向が見られ、ひきこもり期間が3

経験のある者は約80%と高く、高校などの中退がひきこもりにつながっている傾向がみられた。ひきこもりの期間が「6カ月以上1年以下」が14人、「1〜3年」が46人、「3年以上」49人、「経験なし」23人だった。ひきこもりが1年以上の者が調査対象の70%を占めた。

進路を「就労」と「進学・公的職業訓練」(以上、進路決定)、「不就労」と「入院」(以上、進路未決定)の2つに区分し、ひきこもりの期間との関係を分析した。「就労」は、正規雇用、常時派遣、登録派遣、アルバイトなど本人が何らかの形で社会参加できて



調査の結果、対象の132人のうちひきこもり

いるケースとした。大学や専門学校への進学、公的職業訓練参加も進路決定者とした。「不就労」は再度のひきこもりなどにより積極的な社会参加ができなかったケースとした。

進路未決定10人、「3年以上」は進路決定25人、進路未決定24人、「経験なし」では進路決定16人、進路未決定7人だった。

また国のひきこもり支援方針の参考となる精神保健福祉センターの調査研究では、ひきこもりの1.0%と低く、ひきこもりの者の多くが精神疾患との見方をしていた。これに対し同研究所の調査結果では、精神疾患のない者が36.7%と高かった。

同研究所では「ひきこもりの者は精神疾患者であると決定するのは早計であると考えられる」と指摘した。

ひきこもり期間と進路決定・未決定の人数をみると、「6カ月以上1年以下」が進路決定11人、進路未決定3人、「1〜3年」が進路決定36人、

同研究所では「ひきこもりは一度始まると長期化する。ひきこもり年数は3年が就労と不就労の分岐点。ひきこもりの経

験がない者は70%弱の進路決定率」などと分析した。